
朝日ヶ丘三丁目

春野天使

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

朝日ヶ丘三丁目

【Nコード】

N6667A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

黒猫のボクを通してみた朝日ヶ丘三丁目の人間模様。新しいご主人様となった、ちょっと頼りなげな高校一年の翔一家を中心に、今日も様々なドラマが生まれる……。だいたい一話〳三話完結の続きものにする予定です。

初めまして

『ボクは野良猫です。二歳ちよつとの黒猫の雄です。名前はクロと呼ばれていました』

あゝ腹減った……。

ボクは丸二日間、水以外何も口にしていない。……死にそうだが。本当に死ぬかもしれないなあ。まだこの世に産まれて二年ちよつとしか経っていないのに。

ボクはフラフラしながら、土手の上を歩く。自慢の黒い毛並みが泥だらけになつて台無しだ。昨日は一日雨が降つたからね。

三日前まで、ボクがよく行く公園に、顔なじみのおじさんが餌を持ってきてくれていた。でも、そのおじさんが急に来なくなつてしまったんだ。公園に住み、薄汚れた服を着た小太りのおじさん。彼はきつとホームレスだつたんだと思う。

どこに行つたのかなあ？ あのおじさん。住む家と仕事が見つかつたんだろうか？ それなら良いけどね。そうだね、おじさんにとつては……。

けど、ボクにとっては良くない。子猫の時公園に捨てられて、ずっとあのおじさんに餌をもらつていたから、ボクにとっては親ネコを失つたようなもの……。

ネコ年齢にしたら、そろそろ大人だけど、まだまだ幼気な黒猫だよ。おじさん、ボクを置いていくなんて、酷いよお。ウウウ……人間だつたら泣くところだろう。でも、ボクは猫だから泣けないんだよね。や、泣いてる場合じゃない。何とか食べ物を見つけなくちゃ。

ボクは今にも倒れそうになりながら、土手を歩いていく。こうなつたら、次のご主人様を探さなければ！ キュルルル……。ボクのお腹が大きく鳴る。

とその時、どこかから何とも言えない美味しそうな匂いが漂つて

きて、ボクの鼻先をくすぐった。香ばしくて甘みを帯びた匂いは、空きっ腹を大いに刺激する。ボクの口からタラタラとヨダレが滴り落ちそうになる。

お御馳走はどこ？ どこ？ ボクは辺りをキョロキョロと見渡す。

あっ、あった！ ボクは匂いの正体を見つけた。土手の草むらの中に、白い紙包みが無造作に置かれている。ボクは最後の力を振り絞り、紙包み目指して突進した。

初めまして (後書き)

家族を中心にしたホームドラマが書きたくなって、執筆を始めました。連載ですが、一話〜三話以内の完結の物語にする予定です。連載の両立は上手く出来るでしょうか?…… (^^;) こちらはのんびりと更新する予定です。宜しくお願いします。

初めまして

カプツ！ ボクは白い紙包みに噛みついた。舌先にじわつと伝わる柔らかな感触……。アチツ！ あまりの熱さに絶えきれず、袋から口を離す。『猫舌』のボクは熱い物が大の苦手。けど、空腹には勝てない。思い切ってもう一度かぶりつき、破けた紙袋の中からお御馳走を引つ張り出した。上手い！ それは揚げたてのコロッケだった。ボクはムシャムシャと音を立てながら、夢中で食べた。一個目を食べ終え、二個目にかぶりつこうとした時、ふと上の方に何かの気配を感じた。さては、他のノラが来たか！ お御馳走は渡さないぞ！ ……でも、ボクは喧嘩が弱いんだよね。しっかりとコロッケを加え、逃げの体制を整えて、ボクは頭を上げた。

「……？」

野良猫じゃなかった。人間の少年だ。ボクはコロッケを加えたまま、じつと彼を見つめる。彼もボクを見下ろしている。しばらく見つめ合う彼とボク。

「……それ、やるよ」

間をおいて、彼が口を開いた。

「コロッケ好きの友達にやろうと思ったんだけどさ。お前もお腹空いてそうだし」

制服姿の彼は、そう言うふわつとした顔で微笑んだ。少したれ気味の目が、ふんわりとした印象を与えてる。いかにも人が良さそうな人間の少年。人は見かけによらないって言うけど、猫の感として彼は悪い奴には見えなかった。現にコロッケを三つもくれたし。紙袋の中には、もう一個のコロッケが残っている。餌をくれる人間に悪い人はいないんだよ。これ、猫世界の教訓。

ボクは安心して、彼の前でコロッケを食べ続けた。時々、チラチラと彼を見上げて様子を観察する。最初、ボクが食べている姿を眺めていた彼は、それに飽きると土手にゴロンと横になった。どこに

行くでもなく、川から吹いてくる風にあたりながら、気持ちよさそうに寝ころがる。

ボクが三つ目のコロッケを食べ終えた後も、彼は相変わらず転がっていた。

ちよつとのんびりし過ぎかなあ？ けど、猫が好きみたいだし、彼の家までついていったら、またお御馳走をもらえるかも？ ipp そのこと居着いてしまおうか！

色んなことを頭で考えながら、ボクは寝ている彼のまわりをゆっくりと歩いて一週する。

よし、決めた！ 彼を新しいご主人様にしよう。ちよつとスロ―テンポな気もするが、彼は良い奴だ。それに、ボクは人間を見る目があるからね。

いつまで経つても起きあがらない彼にしびれを切らせたボクは、ミヤーとかわいく鳴いて彼の肩をチョンチョンと片手で小突いた。ゆっくりと目を開けると、彼はボクの方に顔を向ける。

「ん？ 何？」

ボクはもう一度鳴いて、出来る限り愛想のいい顔を彼に向ける。人間だったら微笑むってことが出来るんだけど、猫にはちよつと難しい。招き猫の置物のように、笑えたらいいのと思う。ボクはまた彼の腕をつつく。言葉が話せたら、彼に自己紹介するのにな。

えー、名前は、一応『クロ』って呼ばれてました。年は二歳ちよつとです、とか。

彼は大きく伸びをすると、体を起こした。

「そろそろ帰ろうかな」

ボクの気持ちを察することもなく彼は起きあがり、制服についていた草を払う。そして、ボクを置いて歩き出した。

あつ、ちよつとちよつと待って。ボクは慌てて彼の後をつける。しばらく土手に沿って歩いた所で、彼はようやくボクがついてくるのに気付いた。

「何？ ノラも来るの？」

振り向きざま、彼は聞く。『ノラ』？ それボクのこと？

「ノラも家に来るか？」

いや、『ノラ』って名前じゃないんですけど……。ま、いいか名前なんて。今確か、家に来るか？って聞いてくれたよね！ ボクは小走りに彼の元に走り寄り、体をこすりつける。猫のスキンシップだよ。

「僕は、榎本 えのもとしゅう 翔とって言うんだ。高校一年」

ボクを見下ろして彼、翔は、そう言った。ん？ ボクに自己紹介してくれるの？ よろしくね翔。ボクはそう言うつもりで彼のにこやかな顔を見上げ、嬉しい気持ちを目一杯現して鳴いた。

初めまして (後書き)

もう覚えている方は少ないかもしれませんが(^^;)、翔の友人とは「アイドル」のコロツケ好き香田大輝君です。

翔が住んでいるのも大輝や隆輔が住んでる商店街の近くという設定です。香田さんちや隆輔のコロツケ屋もそのうち出てくると思います。

興味のある方は、共同製作「アイドル」をご覧くださいませ
いね。(ただ今執筆休止中)

初めまして

『さんふらわあ』

土手を途中で下りて、横道に入った下町の商店街。その商店街をしばらく歩いて行くと、大きな向日葵のイラストが描かれた看板が見えてきた。向日葵バツクの看板の中央には、ひらがなで『さんふらわあ』と書かれている。

「ここだよ」

翔は、じつと看板を見上げているボクにそう言つと、自動ドアを踏んで中に入つていく。あ、待つて！ ボクも慌てて翔の後に続く。ボクの体重じゃ自動ドアは開かないからね。中に入った途端、香ばしくて甘い香りが漂ってきた。頭上には棚が並び、色んな種類のパンが置かれていた。さつきコロッケを食べたばかりなのに、ボクのお腹はまた空いてきて、ヨダレがこぼれそうになる。あつ、焼きたてウインナがパンの上に乗ってる！ いちごジャムの美味しそうな香りもしてくるなあ。ボクはキョロキョロしながら、首を伸ばして上を見上げる。

そうかあ、翔の家はパン屋さんなんだね。

「翔！ お店から入っちゃダメでしょ」

突然、奥の方から女の人の声がした。

「あつ！ 猫！ 野良猫が入ってるよ！」

エプロンをつけたおばさんが、手を上げて叫びながら駆けてくる。ウヒヤ、恐い。ボクは身をすくめた。

「母さん、この子拾ってきたんだ。飼つていいでしょ？」

「拾ってきた？……」

翔のお母さんは振り上げていた手を下ろし、ボクの真上に来てジロジロとボクを見下ろす。

「桃子が犬か猫飼いたいって言つてたよね。父さんに言つたら飼つても良いって言つてたし……」

翔は上目遣いにお母さんを見ながら、ポリポリと頭をかいた。

「ねえ、父さん！ 猫飼っていいでしょ？」

翔はお母さんから視線をずらし、店の奥に向かって声をあげた。

「何？ 猫だつて？」

しばらくして、白い帽子をかぶった翔のお父さんが出てきた。翔の目をもつとたれ目にした優しそうなおじさんだった。

「おお、黒猫か。おいで、おいで」

おじさんは、ボクの姿を見つけたとたん満面笑顔になった。手招きするおじさんの方に、ボクは甘えた声を出して近寄って行く。のどをゴロゴロ鳴らして、おじさんの足に体をすりつける。おじさんは猫好きみたい。思いつき甘えて愛想よくしとかなきゃ！

「あなた！ 触っちゃダメよ！」

横からおばさんの大きな声がした。おじさんは、慌てて手を引っ込める。おじさんに飛びつこうとしたボクは、カクツと前につんのめる。

「素手で猫に触っちゃダメでしょ。パン作ってるんだから」

床に倒れたボクに冷たい視線を送りながら、おばさんは言った。

「ああ……そうだったな」

おじさんは少し残念そうだ。翔が、おじさんの代わりにボクを抱き上げてくれた。

「良いでしょ？ 世話は僕と桃子がするよ」

ボクを胸に抱いて翔が言う。

「良いんじゃないかい？」

おじさんは、おばさんの顔色をうかがいながら言った。

「……そうねえ」

おばさんは思案顔でフーと息を吐き、ボクの顔をじっと見つめる。と、その時、お店の自動ドアがブーンと音を立てて開いた。

「ただいま〜！」

それと同時に、賑やかな明るい声がお店に響き、ゴロゴロという大きな音と人の歩く足音が聞こえてきた。振り返って見ると、そこ

には赤い縁の眼鏡をかけた白髪のおばあちゃんと髪の長い若い女の人と、中学生くらいのおさげ髪の女の子が立っていた。

「母さん、お帰り。ヨーロッパ旅行はどうだった？」

翔の父さんは、白髪のおばあちゃんに聞く。彼女は、翔のお祖母ちゃんのようだ。

「最高に楽しかったよ！ 近いうちにまた行くつもりさ」

「夏休みに行こうよ！ 桃も行きたいな」

大きなスーツケースをゴロゴロ引いていた女の子が言った。

「私もお供するわ。今年は夏休みとれそうだし」

茶色い髪の若いお姉さんも言う。

「あ、ノラ、僕の家族が揃ったから自己紹介するね」

急に人間が増えてキョトンとしていた僕に、突然翔が言った。

「え」と、こつちが僕のお祖母ちゃん、京子ばあちゃん。それから、お父さんの豊にお母さんの久美子。お姉ちゃんの茉莉子に妹の桃子。茉莉子姉ちゃんはOL二年目で、妹の桃子は中学一年」

「……ちよつと、翔。猫に自己紹介なんかして、この猫分かってるの？」

茉莉子姉ちゃんは、チラツと横目で翔を見る。普通の猫には分かんなくても、ボクには分かるんだよね。ま、ちよつと五人の名前をいっぺんに覚えるのは、自信ないけどね。ボクは茉莉子姉ちゃんに頷いて見せるけど、彼女は気付かなかつたみたいだ。

「おやおや、かわいい猫ちゃんねえ」

京子お祖母ちゃんは、ボクの方に近寄って来て、ジーツとボクの顔を見た。そして、ボクの頭をなでなでする。お祖母ちゃんも猫好きみたいだ。よし！ もつとかわいいとこ見せとかなきゃ。ボクは喉をゴロゴロ鳴らし、ニャーンと飛びきり甘えた声を出した。

京子ばあちゃんのたれ目が、もつと下がって細くなる。お祖母ちゃんも翔と同じくたれ目だ。親子三代たれ目の家系みたい。

「名前は何て言うの？」

「うん、一応ノラって呼んでた」と翔。

「ノラじゃちよつとねえ……」

京子ばあちゃんは、ボクの黒い毛を撫でながら考える。

「品が良くておしゃれな猫じゃないかい」

ボクは何も着ていないんだけど……お洒落なのかな？

「パリの雰囲気がするねえ」

パリ？……。あ、京子ばあちゃん、ヨーロッパ帰りなのか。

「そうだ、パリのギャルソンに素敵な青年がいたんだよ」

京子お祖母ちゃんは、旅を回想するかのように、楽しそうにニコ

ニコと笑う。

「確かフランソワって言うてたっけ……あんたの名前もフランソワにしようかね。うん、決まり、今日からお前はフランソワだよ！」

半ば強引に、京子ばあちゃんはボクの名前を決定した。

フランソワ……ボクってフランス猫？ ま、いいか、名前なんてなんだって。と言うわけで、ボクの名前は、クロからノラ、そしてフランソワへと変わった！

そして、フランソワという名前がついた瞬間、ボクは榎本家の家族の一員となった。お母さんの久美子さんは、ちよつと不服そうな顔してたけど……そのうち仲良くなれるかな？

ボクは野良猫やめました。今日からボクは、榎本フランソワです！ 宜しく。

翔の友達

「行って来ます！」

八時二十分。翔はお店の方に声をかけて、横の勝手口から家を出る。お姉ちゃんの茉莉子さんも妹の桃ちゃんも、もうとつくとくに出かけていた。

翔はのんびりしてるなあ……学校、間に合うんだろうか？

ボク、黒猫のフランソワは、ちよつと心配になる。翔のおばあちゃん、京子さんに名付けて貰った名前、フランソワ……。このお洒落な名前に、ボクはまだ馴染んでいない。もし、ボクがフランスに住んでいるのなら、ピッタリくると思うんだ。パリのセーヌ川のほとりをお散歩するような黒猫ならね。でも、ここは日本の東京、人情味溢れる下町の商店街。ちよつと名前が浮いているかも。

ま、そのうち馴染んでくるかな？ そんなことを考えながら、ボクは翔の後について、勝手口を出ていく。

「あれ？ お前も学校行くのか？」

朝日ヶ丘商店街の通りを歩きながら、翔はようやくボクの姿に気が付いた。『帰れ』って言われるのかと思ったけど、翔はボクをチラリと見ただけで、そのまま先を歩いていく。じゃ、ついに行っちゃうよ。『猫侵入禁止』の学校じゃないなら、大丈夫だね。

翔が急いでいる風もなく、いつもののんびりペースで歩いていると、後からリンリン！ と大きなベルの音がして、キキキッ！ とタイヤの軋む音が聞こえた。誰？ ボクをひかないでくれよ。ボクは後を振り向く。

「翔ちゃん！ 乗ってけよ。後五分で学校始まるよ」

ボクの頭上から元気な声が響く。そこには、翔と同じ制服を着た少年が、自転車に乗っていた。

「もうそんな時間？」

焦る風でもなく、翔は腕時計に目をやる。

「チャリを飛ばせば三分で行けるけど、歩きなら間に合わないだろ
うね」

「そうかな？」

「いいから、早く、早く」

男の子にせかされて、翔は彼の乗る自転車の後に腰をかけた。それと同時に、少年は勢いよく自転車を漕ぎ出す。

「あっ、待って、フランソワがいた」

「フランソワ!？」

少年は急ブレーキをかけ、前につんのめりそうになる。

「誰だ、それ？」

彼は、キョロキョロと辺りを見回す。ボクです！ 榎本フランソワです。ボクはミャーミャー鳴きながら、少年に呼びかける。翔が、ボクのことを忘れないでくれていたことが嬉しい。

「もしかして、この猫のこと?……」

少年はやつとボクに気付き、不思議そうな顔で、じつとボクの顔を見つめる。

「そうだよ。僕んちの猫になったんだ」

「へえ……フランソワねえ」

ボクは勢いをつけ、自転車の前籠に飛び乗った。

「わっ、何？ この猫も学校連れて行くのか？」

「うん、なんか行きたそうだったから」

「はあ……」

翔ののんびりペースに引き込まれそうになった少年は、我に返って腕時計を見る。

「やば！ 後一分しかないや！ 超特急で行くからな、落ちないよ
う気を付けて」

そう言うのが早いか、少年は猛スピードで自転車を漕ぎ出した。ビュンビュンと風を切って自転車を走らせる。ボクは必死で籠に爪を立てしがみついた。何か恐いけど、スリルがあって気持ちいいね！

キーンコーンカーン、自転車置き場に到着すると同時に、始業のベルが聞こえてきた。少年のお陰でギリギリセーフってところかな？ 彼は素早く自転車を飛び降りて、自転車を立てかける。ボクも籠からジャンプして、地面に着地した。

「あ、紹介するの忘れてた」

少年が急いで教室に走って行こうとした時、ふと翔が言う。彼は立ち止まって振り返る。

「何？」

翔は少年じゃなくて、ボクの方を見下ろしていた。

「フランソワ、彼は僕の幼なじみで同級生の香田大輝君だよ」

「……」

猫のボクに話し掛ける翔を見て、大輝は目を丸くする。

「翔ちゃん、その猫、言葉通じるの？……」

「さあ、人間の言葉は話せないけどね。言ってる事は分かるような気がする」

「へえ〜……って、今はそれどこじゃないよ！」

「またもや翔のペースにはまりそうになった大輝は、慌ててダッシュする。」

「あ、大ちゃん、慌てなくて大丈夫だよ。一時間目生物だから、大河原先生、いつも教室に来るの遅いし」

「えっ？ 生物？ そうだったっけ？」

翔の言葉に、大輝はピタツと立ち止まった。なんだ、翔も何も考えてないようじゃあるんだ。……でも、遅刻は遅刻だよ。急いだ方が良いんじゃないかい？ とボクは心配する。

「なら、いいか、ゆっくりで」

少し疑問を抱きながらも、大輝は翔の言うことに納得したみたい。「香田大輝です。宜しく！」

大輝は、人間の言葉が分かる猫だっという翔の言葉を信じ、ボクの方にかがんで元気に挨拶した。それは、当たってるよ。大輝君、なかなか言い奴だね。翔とはタイプが違うようで、似ているのかも？

朝日ヶ丘三丁目

ボクは出来るだけ笑顔になるよう努力しながら、『宜しく』とい
う代わりにミヤ〜と愛想良く鳴いた。

翔の友達
(後書き)

久しぶりに香田大輝君に会えて、なんだか嬉しかったです。(^^)
ただ今執筆中止ですが、楓 詩絵莉の「アイドル」に大輝は
登場しています。次回、隆輔も登場予定です。

翔の友達

自転車置き場から歩いていく翔と大輝。ボクは二人の後をついていく。もうとつくに始業のベルは鳴り終わっているから、他に生徒達の姿はなかった。

いいのかなあ？　こんなのにんびりと……。ゆっくり歩いていく二人の姿を見ながら、ボクは少しだけ心配する。

「あつ、隆輔先輩！」

正面玄関から入ろうとした時、大輝が立ち止まった。大輝の視線の先に、一人の男子生徒の姿があった。ひよろりと背の高いその生徒は、チラリとこちらに目を向けると、悠々と歩いてくる。

「おはようございます！　先輩、もう授業始まってますよ。いいんですか？」

大輝は、自分たちのことは棚に上げて、彼に言う。

「ばっか、俺はモデルだぜ。芸能人。俺の遅刻は先生公認の遅刻さ」

隆輔という少年は、翔と大輝を馬鹿にしたような顔で見ながら、

顔に垂れた長い前髪を片手でかき上げる。モデルって芸能人なの？

「特別に俺だけ『茶髪』を認めてくれりゃいいんだけどな。毎朝、スプレーで黒く染めるの時間かかんだよ」

「はあ、隆先輩もなかなか大変だね。そう言えば、この前の『朝日ヶ丘商店街の広告』にパジャマ着て載ってたよね。あの写真は髪が薄茶色だったな」

翔は隆輔の真っ黒な髪を見ながら言った。

「あの写真は気に入らねえ。なんで俺がスーパーで売ってるような安物のパジャマなんか着なきゃいけないんだ」

「でも、よく似合ってたよ」

翔は屈託のない笑顔を隆輔に向ける。大輝の先輩ってことは、翔にとっても先輩のはずだけど、翔は彼にタメ口だ。

「翔ちゃん、フランソワに隆輔先輩を紹介しなくていいの？」

足元で隆輔を見上げていたボクを見て、大輝が尋ねた。

「フランソワ？ なんだそれ？」

「翔ちゃんの猫ですよ。ほら、先輩の足元にいる」

「は？……」

視線を落とした隆輔の足を、ボクは挨拶代わりに片手でチョンチョンと叩く。

「ゲツ、黒猫……」

招き猫みたいに片手あげて、瞳をうるうるさせて隆輔を見上げたんだけど、彼はもろに嫌な顔をした。隆輔は猫嫌い？ ボクのブリッ子が通用しなかった。

「フランソワ、彼は一年先輩の海棠隆輔君だよ。僕や大ちゃんと同じく朝日ヶ丘商店街に住んでいるんだ。僕ら三人、幼稚園時代からの幼なじみってわけ。家はコロッケ屋さんやって、隆輔先輩は朝日ヶ丘商店街にある芸能事務所でモデルのバイトやってるんだ」

「なんで猫に自己紹介なんか……」

隆輔は、軽く足を振ってボクの手を払い、怪訝な顔で翔を見る。

「なんでも、人間の言葉が分かる猫らしいっすよ」

大輝が真顔で答えた。

「馬鹿みてえ……」

いや、隆輔君。それが本当に分かっちゃうんだよね。ボクはもう一度隆輔の前に走り寄る。

「わっ！ 黒猫が横切った！ 朝から黒猫が横切るなんて縁起わりい」

そう言うと、隆輔はボクを避けるようにしながら、足早に玄関に歩いて行く。

「隆輔先輩って案外恐がりなんだな。迷信を信じるなんて」

学校に入って行く隆輔の後ろ姿を見ながら、翔は笑った。

「おっと……翔ちゃん、僕らもソロソロ教室に入った方がよいよ。」

さすがの大河原先生も来る頃だ」

腕時計に目をやり、大輝が言った。

「そうだね」

翔は大きく伸びをする。

「朝から生物なんて嫌だな」

二人がようやく教室に向かおうと歩き出した時、体操服を着た男子生徒達が、校庭の方へ駆け出してきた。生徒達の後からピピーと笛を吹きながら先生が駆けてくる。

体育の授業のようだね。

「……あれ？ 松平先生だ。あれって僕らのクラスじゃ……」

何気なく校庭に目を向けた大輝は、立ち止まって彼らを凝視する。

「本当だ……」

翔も体操着姿の生徒達を見つめる。

「あ、生物って二時間目だったよ。一時間目は体育だった……」

「え？……」

と、目を丸くして顔を見合わせる二人の姿に、体育の先生が気付いたみたい。

「香田！ 榎本！」

先生の大声がグラウンドから響く。

「やばっ、よりによって担任の授業に遅刻なんて！」

大輝の顔は蒼白になる。二人は大慌てで教室に向かってダッシュする。ボクも一緒に学校の中に入って走って行った。

「後で校庭十周して来い！」

学校の廊下を走るボク達の後から、松平先生の良く通る声が追いかけてくる。

「松平先生冗談きつい……」

いや、冗談じゃなくて真剣に怒ってたよ。翔は廊下を全力で走るだけで息が上がってる。

時間割の確認はちゃんとしなくちゃね。少しだけ二人の事を気の毒に思いつつ、自業自得かもね、と思うボクだった。

朝日ヶ丘三丁目

翔の友達

翔が授業を受けている間、ボクは学校探索に出かけていた。学校って面白い！こんなに楽しい所なら、毎日通っても良いと思う。授業中の静かな教室にこっそり入ると、流石に先生に怒られて追い出されるけど、休み時間になると、生徒達は興味津々でボクに近寄って来る。女子生徒達は、『かわいく！』って、ボクの頭を撫で撫でしてくれるんだ。ボクってモテるよねえ。ボクは、ちよつとだけいい気になつて、喉をゴロゴロさせ、女の子達にすり寄って甘えた。

昼休みのお弁当の時間には、みんなからおすそ分けして貰って、ボクのお腹はすぐにいっぱいになった。女の子達に撫で撫でされる時より、幸せ気分！満腹になつた後は、眠くなつて校庭の木陰でお昼寝タイム。そよそよ吹く風が気持ちよくて、ボクはしばらくぐっすり眠っていたよ。

気持ち良かった。猫に生まれて、ほんと良かったなあ。

夕方、翔が校舎から出てくるまで、ボクは校庭をのんびりと散歩していた。

帰りも、翔は大輝と一緒にだった。大輝は自転車を押しながら、翔と並んで歩いて行く。ボクは二人の方へ駆けて行くと、勢いよくジャンプして自転車の前籠に飛び乗った。

「わっ、フランソワだ。今までどこ行つてたの？」

のんびりと学校見物にね。ボクはそう言つつもりで、大輝に向かってミャ〜と鳴いた。

「いいなあ、フランソワは自由で。僕も猫になりたいや」

猫はいいよ、気ままで。校庭十周が堪えたみたいで、翔はどことなく疲れていた。

「なんだその猫、ずっと学校にいたのか？」

ボク達が歩いていっていると、後から隆輔の声がした。

「先輩、今日はよく会いますね」

「これから『香田芸能』に行かなきゃなんないからな。今日は学校から直行さ」

『香田芸能』？ 隆輔がモデルのバイトしてる芸能事務所かな？

「僕も直行です。先輩も自転車に乗って行きますか？」

「は？ やだよ。モデルの俺が自転車通勤なんか出来るか」

「でも、電車で行く方が遠回りになっちゃいますよ」

「いいんだよ。俺はいつも電車通学なんだからな」

隆輔の家も朝日ヶ丘商店街なら、確かに遠回りだね。駅に行く間に、家に着きそうな気もするんだけど……。

「あ、フランソワ、大ちゃんは『香田芸能』で事務のバイトやってるんだ。香田芸能は大ちゃんの伯父さんが経営してるんだ」

翔はボクを見て言う。

「いちいち猫に説明すんな」

隆輔は白い目で翔を見る。

「や、でも先輩。フランソワは、人間の言葉が解る猫ですから。ちゃんと説明しといた方が良くいかもしれませんよ」

「解る訳ねえだろ！ フランソワって……こいつはフランス人か？」

それを言うなら、フランス猫。でも、ボクは日本猫だけだね。

「フランス旅行帰りのおばあちゃんが名付けたんだよ」

翔がボクの代わりに答える。隆輔は軽くため息をつくとき、翔と大輝に手を振った。

「じゃあな」

校門を出たところで、隆輔はボク達と別れ、駅の方へと向かって行った。

「絶対、自転車飛ばす方が早いんだけどね」

モデル気取りで颯爽と歩いて行く隆輔の背中を見ながら、大輝は呟いた。

「翔ちゃんも事務所寄って帰る？」

隆輔が角を曲がって姿を消すと、大輝は翔に聞いた。

「うーん、『香田芸能』や『モダン食堂』や『美容室みるく』もフランソワに紹介したいけど、今日は母さんに店番頼まれてるんだ」
そう言うと、翔は籠の中のボクに目をやる。

「フランソワはどうする？ 大ちゃんと一緒に行ってみるか？」

「どうしようかなあ？ 『食堂』という響きに魅力を感じるし、『みるく』っていうのも美味しそうだなあ。ボクはしばらく考える。」

でも、今日は学校でいっぱい御馳走にありつけたし、まだお腹空いてないんだよね。ボクは自転車の前籠に前足をかけて、どうしようかと迷った末、ピヨンと弾みをつけて籠から飛び降りた。『香田芸能』はまたの機会に行くとしよう。

「お前も家に帰るのか？」

翔の足元に寄って行ったボクに、翔が聞いた。そうするよ、という代わりに、ボクはミャーと鳴いて返事する。その様子を大輝はジツと見つめていた。

「やっぱ、スゴイよ翔ちゃん、フランソワは、人間の言葉ちゃんと解ってる」

「フランソワの言葉も解れば便利だよな。オウムみたいに猫も喋らないかなあ？」

「確かに便利かも。でも、ちょっと怖い気もする……」

まあね、猫って頭良いから、喋る猫が現れたら人間を支配しちゃうかもね。心の中でクククと笑いながら、ボクは大輝を見つめ返した。

「それじゃ」

大輝は、少し慌てて自転車のペダルを踏む。ボクが目、ちょっと恐かったかな？ なにしろ、隆輔の怖がる黒猫ですから。先に帰って行く大輝の後を、ボクと翔もゆっくりと歩いていく。心配しなくても、今のところボクは、気ままな飼い猫で生きてくつもりだよ。翔の家族や友達も気に入らず、朝日ヶ丘商店街や学校も楽しそうだ。家までの道のり、翔は商店街のご近所さんについて、丁寧にボク

に説明してくれた。このクリーニング屋さんは　とか、この魚屋さんは　とか。一軒一軒お店の名前と働いてる人の名前まで教えてくれた。もちろんボクは翔の言うこと分かるんだけど、すれ違っていく行く人達は、翔のこと変な目で見ていたよ。

翔は全然気にしてないみたいだったけど、『猫に話し掛ける少年』って、朝日ヶ丘商店街では、有名になっちゃうかもね。そしたらボクは、人間の言葉が解る猫って有名になれるね！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6667a/>

朝日ヶ丘三丁目

2009年7月2日03時57分発行